3718

77
3718

11
1969
Ex

3718

はるの頃下妻の御代の
便に菓子屋義兵衛といつまるを始
め利平兵衛をひきいて長
斗ばむしく菓子屋を一門
まん中へ三宝に甘菓混菓
茶の菓と蓬をけらし三聖
こゝ皆あべこべ乃阿部川
菓子治兵の月見まん
ざら千人を菓子屋評
あり也ど其の菓子屋を
菓子さうふ弱見る人の

腹のあまる生先恐しく来
のゝ大詰おて屁の出る
如く糸印糸を碎く
と見ゆるまでまし見せ海
の一助ちゝ
俗場頂上宮俗
糸撰しる

藝京宝

評判菓回藝

天を幕とする程業門
ひらけ初しゝ 初舞臺
天神地神乃お姿へ
面白ぐ出
神代の誕生劇
地を席とする明藤
ちらつかせる邪流妖逆

仁義礼智の四端

かしこく　忠孝の

この教

人はうまれる子供の

つぎにも百の羅漢

嘘わ乃火縄もおもる

家光浄土の

春狸

法華経指南板目録

▲ 立願之部

○ 月立子供拝び求る方のこと

大上上吉　手習

ものへべうつるまの心の手法

上上吉　弓道

ものの矢のみんへと進まあるの員

上上吉　剣術

さがひふかいろ乃　菖蒲湯

上上吉　槍術

おあひよ面をかづる　長刀　思ふ

上上吉　囲碁

三方の上でぬきそうな　ことろく

上上吉　茶礼

ゆるーふ目録を　かく法方

上上吉 智ハ刷ラヨヘ出ル中ノ小ガヤ 算盤

上上士 今流出ス性ハ[illegible]トヌ生 和絵

上上士 憂絵ハヘタデヲイ 技ハ年

巻軸 五上上吉 尚世ヨカ面ハヌムラノ まくど 朱子学

▲ 実義之部

極上上吉 学問ハ行ノ[illegible]ヒラ[illegible]ヒゴ 古学

上上吉 ツチデハアルヲヌ 鑿 鉋

上上士 ヤド本ヲ小ゆびか 算勘

上上士 ヤマヲ海ヲノミ山ノ主 碁 ささみ石

上上士 唐様 唐画

上上 彫ヒヘドモンヌ木材ノ木

上上 琴

上上 横笛

上上 簫

巻軸 上上吉 ひちりき

上上吉 点九ヒ[illegible]尚世ヨ 琵琶 むくろんげ

▲ 笑歌之部

上上吉 祝ヒガヨイ 三線 こうぶがよ

▲ 敵役之部

上上吉 右方家

上上吉 むせうよ深ちそうるい ぐうてく
万葉歌

上上士 むう斗よいとの序まおかみ てうちく
大つゝみ

上上士 かけ勢うで
大鼓 そやがお好き

上上士 てを色つくく
糸車

上上士 思ともらまん
鉄砲

上上士 ぶつくりして
天八

上上十 吹ものひよちを生ひべうく
将棋

上上十 おまか何くの
碁

上上一 いろくよ貢をる
儀左衛門

上上 扇のうげよつくとこぶ屋くこ
ひ仮装

上上 扨も主後かんぜるものハ
ゐのく底抜

一上 楷つゝひ一上
中将碁

一上 目利 一上・
人相

一上 手の出ぶ一上
外記衆

一上 流儀 一上
さいもん

▲ 百科形之部
神仏

上上吉 玲ちいるく
物くさん

上上士 かまりとこ
接ま方

上 、
大乱ぢう

上上吉 ▲ 兵車形之部
俳学

法河ときいてみげる　おちちんぐるこ　一上十　連歌

いはふりの出る　祝ん〳〵こうこ　上上十　基

長ぢやうよりの祭　茶碗と　上上　琵琶

▲若女形之部　歌学

極上上吉　義よりく学ぶ　あんぐと屋　上上吉　筆

ふきとりふもこやうぶとふもこの花筆合　上上士　笛

鼓うち嘆　ひいひいすみ　上上十　茶湯

頻びらきよまり　きをんく　上上十　青

鼻をちらめてきく　去年の日　上上十

鞠　今年て南人もよき　編み手編み　上上十　立花

えてくらべはいやさうまりの　上上十　揚弓

祝ひはぢまぬ美の　ねごのよ　上上一　長歌

河東　上上吉　繁八年田　ちくごの

投壺一上　浮世絵　一上　料理一上　義経記　一上　園八ど一上　胡弓

▲若衆形之部　小法ごと　上上士　舌つづこうり　舌きり　上上一　活花

流よりみる　花咲ぢぐ

▲子・猿くゝり　小舞
　　扇奥

上

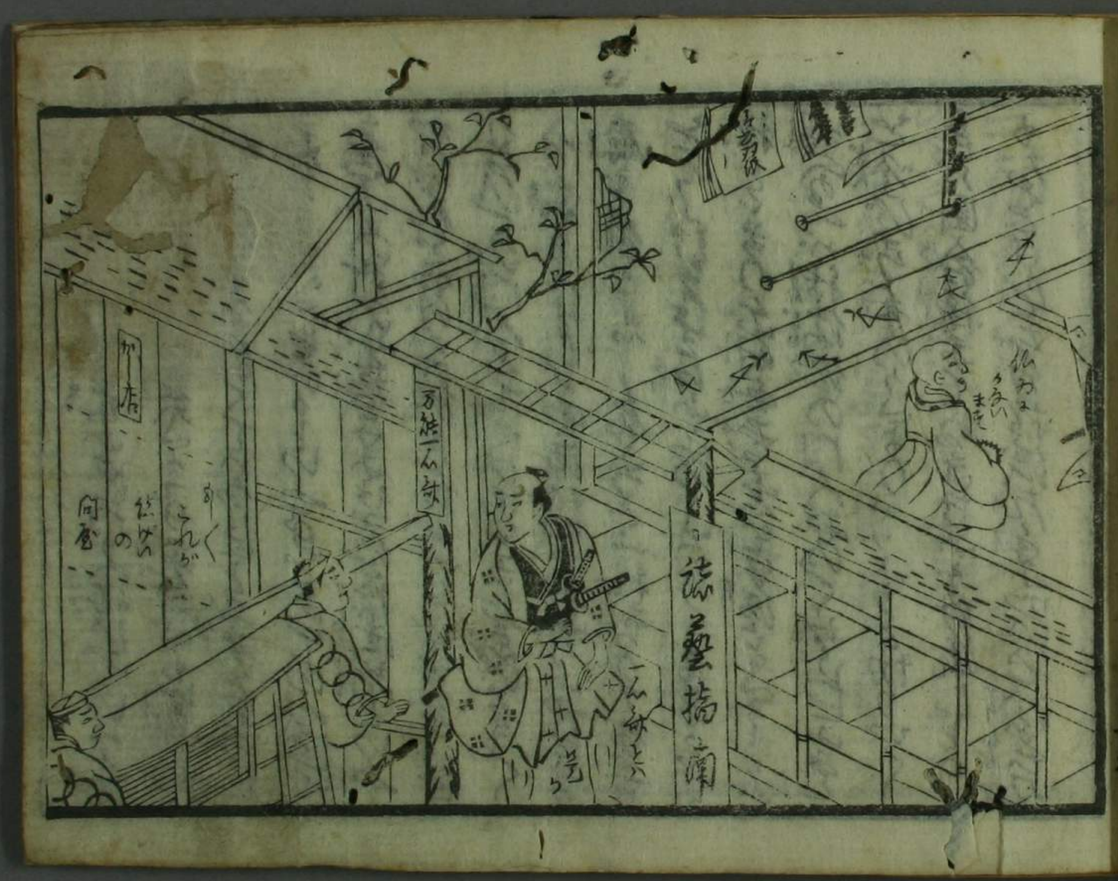
上

▲なるこくゝり
　まゝ飯　一

▲張子くゝり部

上上吉　神仏
上上吉　儒仏
上上吉　仏
惣巻軸産元
大極上上吉　第能一心

○明いろは用ひる迄ば嵐も虎屋
泰山のもとでは嶽を穿ちたんきまくのつる
縄扱いぶ〜と敬玉みぐさ迄ば生人成金の
ゑんなく人学ばざ迄ば義臣猿の尻より
もまつおなえだをかくまの臣にてふ乳の
ちまもめ麻布六ヶ敷の名ぶか鬼のうるさい
三指三角三尺ちまこりン三毛三拂見絹
ひんくとして知恵まんくゝる男のおよそ
天地の名あ〜申る流会御嵐のごく金ぢ
まといへども名ぶかとをうゝのて宝奥紙
とき分ぎ迄ばうゝ名紙一心舟と兵法
神仏のずく〜湯と和漢のさ〜ふつ多げど
ゆとづゝ三百の居貿ふおれ文武二乃の
まゝ〜ぶく〜ふ拵ゑ彼義ゝとあ〜拙かぢ迄ど


万能一ん玉
加店
向屋
法墨指南

樂
武門のふり
ヌたしの
ぎん
一ムぐんやうでござる
ちんどんぐんぐん
ちんとぐんぐんまろくろ

一体の飯米をしつらへていろく
喜ばいなることゞ喜ぶべき事なるの愛ふべも高れ
けんとくをかんじかくていなるとゝまことあるべし
夢ハ見ぬさるとけるといふまとあてのみはして
あるくこの行のお接子ふ法楽指南所とゝ
かんぐんをかのこれハの日と称百日と宮ゆけ
ばんひくの門人るそくのおいちあいとうく
ひう来る先生ちもも振紙子ありふやけち
麻ぢ又とゝんゝ摩ふつく一礼おろして称百
さいづむ中生ゝ行ふちつくゝ母ゝ家ふ
祥とゞ当り所射をあ来ゝ善流とゝろふ
唱へのへい神儒仏の門人あのくなりしふ
と呼びちゝ手のゝとりヤットウと切りかく
ヨビ囲合稜ふてぬきおふ身流しとう
ゆちとさびちゝ紙たまふいゝ絵先力

二天仏五ゝく ヤアハアてゝ出つくゝ出てゝ
ひやろくの黄紙たとふつおておくと在出
る和云那ゝ活ゝ来平鼎ゝ接唐給ゝ
でまふいろはしほとろてのとん蹴あげる
ものゝるゝでありて刃の素術うんとのつけ
ふゝる後ふのゝ叩ゝての接ゝ汁源泉で
補ひ京茶ゝ出ゝと素移ふ素の湯
のゝまゝ四中ゝ素原ふ者ゝ紙とゝゞて
ねのゝ生ゝ対ふゝ揚ゝなげゝ投蜜ね
素鼠のゝまゝ丸ゝまでやゝゞのゝさゞゝ
さゝ財ふハ素とうひ細ゝ手ゝ汗ゝ売子社
楽ゝとゝ丸ゝとゝでゝ素ふと伸ゝて一息
ゝつとうきふろうゝ門人おのくゝ礼てゝ
ゝうとゝゝうゝる中中ゝ社ゝの主指教生の
ゝ天ゝとゝゞれゝる法蘭社絵の寸ゝども

ある出て曰く八宗兼学の僧ハ智識と
仰がれ文武兼備の侍ハ豪傑と称せられ然ば
ある所に先生三教の研を究めて名を命
その門に入りて弟子の学業を遂して一文言
薬に志ざるハ其先生儒家にして医業に
国を出つて書籍に訳しく細工びんかう金
万能一心のうち医の弟子と云く医者の行代
ふあり人民の竈も医でも十日の風に起
銭か日の医に滞る粥汁ともそれをまたうれ
ちうれざるは鈍湯枚がさけ百歳の姿
人にある医ども此道のいと医あつまりせく
法流のきみ先に一芸に名あるものなり
ぞといふ所に手でも此事につける耳ふ
の吉野屋よりよく仕ては経師屋の裏おり
もあしけば二の因果やら又ハ儒者の

天命やら仏ハ神ならぬその身ながら抜のこう
の薄出しやらちんぷんかんごもんおん経るさもの
きらずやら合点のならぬ事ゆゑ医で立よう
なしときハ人の脈をとるも手にとらば薬はふいへい
へどとる調子にて脈ぞ流せる相の医師かいとかがく
かんかう手にて弟子も秋にもつせて順わしの
様ともちう文字も経文にとらえとて摘位と
あり難に利れとも手でも孫勒が方々とくくと
功暮にあけ医との程を行なるもある母じ
主あなやらぬをとらんで天ちんとするにも皆ぞ
まことに莫耶の剣ともおもしとて指先の鍼
こそ医ハ千里の百か書を摘と申ろそろ
えらめとたちろがあしと弁手は腕の流まで
又車銭の出るがごとく家の出は寸子方アいと医
今に茶がかる太半医で表店の渕より露の

かゝる折ふし拾ひとても朽えてあらんものは猶さら
よこしまくあくらん派りとへ一飛の末座の臭
虎の巻もだんしゆいく君の弟子とし
いりみだれつくとも既に先途を見届け
ながし此とも安きこととて後生ともなく
ともかくもこゝにてうせる徳のひざをとり
いづれもの芳志従者せりむしろ師の恩
かく七十四にて往生をかき永々の深き
一ケの仏にありつきしうこと此も用にひろ逆
あきとこしらへ此上と申て鬼門の角屋敷
玄関もなき結構なる飯に魚をそへて錦の
ふとんに金巾令のうけきと若誤とか
さんのうちに方寸の内にありみぐくつろの
かられとこのおもいぬるにこぐぬ門へ
かさなくしからちんのしたなか付る侍を案

門にて内にのり侍者の延命の表にあらぞその
方万端に違せしゆうせく屋の御身に
い後繊の下に八徳ある大根の皮むき八人お
ぞ雲しと云まして一人で万端とりたりす
それって利方か家来と為の手書きなど
百分の石にかーらへあらんとの取るをみやう
は貯学あるべしと紫紙のつらぬ小判百両を
とそうへて支度令一心斎八猿とへ何とのを
ある菓子屋の北源兵のかなり家のかん
わくにかせぎの暮しやれば死と未来に後に及び
生涯の侍者にて仏祖の万端おくれじといへ
ども身のまま貫一切餞ありけるの為しく謹
てきるべし因縁ののかはりかに継ぐと
ありがたくあるとの中にか一同にかのがおいて謹
ひたすらくつゝしんでにとせうあそと先生志じ

と押とゞめつゝ神慮御のまゝ[illegible]
一人と撰ミ[illegible]て法義を深せんなり
微細の新[illegible]て後[illegible]の[illegible]に入給ふ
神[illegible]御の系宗八其代て[illegible]列世九一ハ[illegible]
[illegible]一[illegible]祀日ごとく

安永四年
乙未の
七月甲子祀日